ランゴバルドのカトリック改宗とビザンツ＝西方関係

竹　部　隆　昌

The influence of Lombards' Conversion to Catholicism in Byzantine Italy.

Ryusho TAKEBE

はじめに

所謂ユスティニアヌス帝の再征服は、北アフリカのヴァンダル王国を短期間で征服したまでは良かったのだが、その勢いで当時東ゴート王国の支配下にあったイタリア半島へ攻め込んだゴート戦争では、進撃当初は連戦連勝であったが、東ゴート側の巻き返しにより戦局は膠着状態となり、実に20年以上に渡る長丁場となった。この戦闘の泥沼化により、イタリア半島は疲弊し、嘗てのローマ帝国の栄光は完全に過去のものとなってしまった。既存の社会の崩壊により、歴史学的にはイタリアにおける「古代」が終焉し、「中世」が始まったと評価されている。(1)

そのような犠牲を払って回復したイタリア半島だが、ゴート戦争終了から程無くランゴバルド族の侵入が起こったことにより、北部イタリアは早々と侵入者の征服を許すこととなった。テオドリック大王のもとで共存してきた正統信仰のローマ人と異端アリウス派の東ゴート族と違い、ローマ人がランゴバルド族に抱いた感情は甚だ悪かったことが、後の大教皇グレゴリウス一世が書簡において、「彼らにとっての慈悲は死である」とランゴバルド人を酷評していることから確認されてきた。(2)

比較的遅れてゲルマン民族大移動の波に加わったランゴバルド族は、ローマ帝国との接触も薄く、三位一体の正統信仰を一時期巻き返して圧倒していた時期に実現したゲルマン布教とは無縁であったようで、やはりグレゴリウスの書簡で「多神教徒で偶像崇拝者」と非難されていることからも、ランゴバルドの宗教は未だゲルマン異教の段階にあったと思われる。ランゴバルドのアリウス派への改宗の経緯は不明だが、東ゴート王国時代は、北イタリアは東ゴート族、中部・南部は旧ローマ帝国の元老院貴族層と、新旧支配者と正統・異端キリスト教徒との住み分けがなされていたため、ランゴバルド族は東ゴート族の影響でアリウス派キリスト教に帰依することとなったと推定されている。しかし、歴代ランゴバルド王で明確にアリウス派信者と確認できるのは二人だけであり、ランゴバルド族全てがアリウス派であったという見方は的確ではないという指摘もなされている。(3)

ランゴバルドのカトリック改宗については、バイエルンから嫁入りしたテオドリンダがカトリックであり、夫アギルルフ王との間の息子で後の王アダルヴァルド（616 ～ 626年、604年から父と共治）に603年に洗礼を施させたことで、アダルヴァルドはランゴバルド初のカトリック教徒となったとされている。テオドリンダは大教皇グレゴリウス一世とも友好関係を築き、ランゴ

バルドにもカトリックが増えたが、アダルヴァルドが義兄でアリウス派のアリオアルドに626年に暗殺されたことで、カトリック化は一時頓挫することになった。ランゴバルド族全体のカトリック改宗は680年まで待たねばならなかった。

このランゴバルドのカトリック改宗により、教皇のビザンツ皇帝権からの分離・独立が強まったとされている。しかしカトリックへの改宗がなされた680年には、ランゴバルド王国の最初の外交使節がコンスタンティノープルに到着し平和条約が締結された年であり、改宗は条約締結直後であるから、改宗のイニシアティヴはビザンツ側にあったと考えるのが妥当である。またランゴバルド王がビザンツのラヴェンナ総督府占領の際に、占領地をビザンツに返還するように王を説得したのは教皇であることを考えると、ランゴバルド・教皇・ビザンツの関係は、余り単純化して良いものとは言えない。本稿では六〜八世紀のイタリア情勢についてカトリック改宗の意味を中心に分析を試みたい。

第一章　ランゴバルド王国とビザンツ帝国

568年にアルボイン王の率いるランゴバルド軍は、フリウリからイタリア半島への侵入を開始し、フォルム・ユリイをキヴィダーレと改名してランゴバルドの最初の拠点を築いた。この拠点を甥のギスルフに任せて更に進軍したが、これによりギスルフは最初のフリウリ公となった。翌569年にはランゴバルド軍はミラノを占領し、570年にはパヴィアを陥落させ、そのパヴィアを首都に572年に遂にアルボイン王はイタリア半島北部にランゴバルド王国の建国を果たした。王国建国より早く、570年ランゴバルド族のファロアルドは半島中部のスポレートを占領し最初のスポレート公ファロアルド一世と称し、同年やはりランゴバルド族のゾォットが南イタリアのベネヴェントを占領してベネヴェント公と称した。この両公国の建設については、長らくランゴバルド侵入の別動集団によるものと考えられてきたが、ボグネッティの功績によって、ファロアルドもゾォットもビザンツ帝国軍に籍を置いていたこと確認され、両者は傭兵として各々スポレートとベネヴェントの地方軍団長であったのが、反旗を翻して独立したものと判明した。(1) 日本語では、ファロアルドはスポレート公、ゾォットはベネヴェント公と表記されるが、「公」と訳されたドゥクス（dux）は同時代のイタリアにおいては、本来はビザンツの地方軍司令官の称号であり、両者は支配権を奪取した後も、ビザンツの軍職名を名乗り続けたということだったのである。両者の独立と王の侵略との間に、何らかの相互関係があったかどうかについては不明である。ただ時期が同じであったため、王軍とは異なる侵入隊があったかのように、長年研究者が幻惑されてきたことは否めない。イタリア侵入以前にランゴバルド族は、キリスト教との関係においては、正統信仰とも異端アリウス派とも没交渉であったことを考えると、両公国を建設したランゴバルド族がアリウス派であったとは考えにくい。実際資料においてランゴバルドのカトリック改宗が述べられるのは王国においてだけであり、イタリア半島の中部と南部は、東ゴート王国時代においてゴート族の影響下には置かれておず、ゴート族侵入以前の社会を維持していたとされているため、また正教会のビザンツ軍に属していたことから考えて、両公国のランゴバルドは建国時点で正統信仰を受け入れていたと考えるのが妥当であろう。

王国と両公国の関係についてだが、アルボイン王が572年に王妃の妻ロザリンドに暗殺された後に王位を継いだクレフ王も574年に暗殺されてしまうと、諸侯は次の王を立てず、ランゴバルド王国は30人以上の諸侯が支配する状況となった。(2) このランゴバルド王空位時代は「公達の時代」とか「諸公の時代」と呼ばれるが、この王国の状況の中スポレートとベネヴェントの両公

国は蚊帳の外に置かれたことで、独立を謳歌できたようである。夫アルボイン王を殺害したロザリンドは、直後にビザンツ領に逃亡している点から、この暗殺に対してはビザンツの謀略説が昔から指摘されている。これらランゴバルド諸公に対してビザンツは金銭による懐柔外交を展開すると共に、574年にランゴバルド族の一部が南仏プロヴァンスに侵攻したのを利用してフランク王国と対ランゴバルドの同盟を結び、同年ランゴバルド王国は今度は逆にフランク王国の侵入を被ることとなった。しかし、この574年の遠征でフランク側は、貢納と領土の割譲という条件に満足してランゴバルドと講和し、以後イタリア半島への軍事介入には消極的となってしまったため、ビザンツ側の思惑は結果的には頓挫してしまうこととなった。(3) ビザンツ軍自体による最初の本格的なランゴバルド攻撃はようやく577年に展開され、皇帝ユスティヌス二世の義理の息子バダリウスが総司令官として派遣されたが、結果は敗北しバダリウスも戦死した。(4) その後も続くビザンツの脅威に対してランゴバルド貴族は、584年前王クルフの息子アウタリウス（584～90）を王に選出し、ランゴバルド王の「公達の時代」は終わりを告げた。(5)

アウタリウスの即位に対して、ビザンツは再びフランク王国に接近し、その勧誘に応じてフランクは585年と588年にイタリアに再侵入した。これに対してアウタリウス王は、貢納を条件に589年講和を成立させた。しかし翌590年にフランクは大軍をもってランゴバルド王国に遠征し略奪したが、同590年のアウタリウスの死後に王位に就いたアギルルフス（590～616）は、591年に毎年の貢納を条件にフランク王国と和解に漕ぎ着けた。(6) 和解に成功したアギルルフスは、ビザンツに対する攻勢へと転じた。593年にはローマを包囲し、攻勢の中で594年マウリキオス帝が任命したラヴェンナ総督ロマノスと和平を結び、大教皇グレゴリウス一世と交渉の上598年に教皇とも講和した。(7) しかし平和は長く続かず、同598年ラヴェンナ総督カリニクスは戦闘でアギルルフス王の娘とその夫を捕虜とした。(8) また602～3年首都パドヴァで対ランゴバルド反乱勃発したが、辛くも鎮圧に成功した。603年には逆にアギルルフス率いるランゴバルドがビザンツ領のマントーラを占領している。そして同603年アギルルフス王と総督スマラグドゥス間で和平が締結された。(9) 前述のように、この603年にアギルルフスの王妃テオドリンダが息子アダルヴァルドに洗礼を施させたことで、アダルヴァルドはランゴバルド初のカトリック教徒となったことと、ビザンツ＝ランゴバルド間の和平の締結とは無縁ではあるまい。(10) アギルルフスも妻テオドリンダの影響でカトリックに改宗した。ランゴバルド王国についての歴史的評価としては、先王アウタリウスの代に首都パドヴァを中心として王国がまとまり始め、アギルルフスの治世下で統治制度が整って国家として機能し始めたとされている。またアギルルフスの治世に実現された「平和」については、反ランゴバルド色が強いとされる『ランゴバルド史』の著者パウルス・ディアコヌスでさえ絶賛している。(11)

616年アギルルフス王が亡くなると王位は息子のアダルヴァルド（616～626年、604年から父と共治）が継いだが、実権は王母テオドリンダが掌握し、ビザンツとも教皇とも平和が続き、同時にミラノを拠点としてランゴバルドの文化的ローマ化も促進された。しかし、626年にアダルヴァルドが、義兄でアリウス派のアリオアルドゥス（626～636）に暗殺されたことで平和は終わり、修道院に退いた王母テオドリンダも翌年に没したことで、ランゴバルド全体のカトリック化は一時頓挫することになった。暗殺による王位簒奪が成功した背景には、ビザンツとの融和政策に対するランゴバルド貴族の不満をアリオアルドゥスが解消した点にあったとされている。(12) その理由は、ランゴバルド王国内でアリウス派によるカトリック迫害などを記した史料がないことから、ランゴバルド王国内での両派の宗教的対立は存在しなかったと結論されているからでもある。(13) また当時のランゴバルド王国では、カトリック信者は農民に多く、貴族層にアリウス派が多かったと推定されているからでもある。そしてアリオアルドゥス以降、ポー川を挟んでラヴェ

ンナ総督府と対峙する状況で、ランゴバルド諸王は国境防衛戦をアリウス派兵士で固めた。[14] つまり、当時のランゴバルドにおけるカトリックとアリウス派の相違点は、政策的に親ビザンツか反ビザンツかの差異にあったわけである。アリウス派の延命は、信仰よりも反ビザンツ＝イデオロギーとしてのものだったと言えるのである。

第二章　ランゴバルドのカトリック改宗の舞台裏

ランゴバルドの侵入に対して、当初ビザンツ側はポー川の水路を利用して、ランゴバルドの離反策を謀った。572年の王国建設者アルボイン王の暗殺では、王妃ロザムントは夫の従者を唆して夫を殺害した後、ポー川を使ってラヴェンナに逃亡してビザンツに亡命した。[1] 六世紀を通じてラヴェンナはランゴバルドの反乱分子の逃亡先であり続けた。この時期、ビザンツ東方領で多くのランゴバルド人が傭兵として軍務についていたことが、史料から多く確認されている。[2] クレフ王暗殺の574年からのランゴバルド王の不在は、王国内の諸公の跋扈を招いたが、元々ビザンツ領からのランゴバルド傭兵の分離独立という建国の由来を異にする、スポレート・ベネヴェント両公国の躍進も許すこととなった。582 ～ 84年前述のスポレート公ファロアルド一世がラヴェンナの外港でもあったクラッセ軍港を初めて攻撃し、585 ～ 86年の間占領に成功した。[3] この事態に対して、ビザンツは584年マウリキオス帝（582 ～ 602）はイタリアにおけるビザンツの支配体制の改革を行ったと考えられている。その根拠とされるのは、11月4日付けの当時の教皇ペラギウス二世が、後に大教皇と呼ばれることになるグレゴリウス（一世）に宛てた書簡で、デキウスなる人物の肩書として、総督（エクサルコス）称号が初めて登場することである。[4] これを証拠に、後のテマ（軍管区）制度の初期形態とされる、総督が軍民両方の最高指揮権を掌握するラヴェンナとカルタゴの総督府（エクサルコス）制度設置が、マウリキオス帝の業績とされているのである。時期的に見て、この制度改革は、「公達の時代」ランゴバルド王国よりも、目前の脅威であるスポレート公対策のものと見るのが妥当と思われるが、前王クルフの息子アウタリウスが同年584年に王に選出され「公達の時代」が終わったことを考えると、[5] ラヴェンナ総督府設置が王国再建の直接的原因と考えて良かろう。

しかし「公達の時代」は終わって以降も、不満分子のランゴバルド公もおり、その親ビザンツのランゴバルド公の代表例とされるのがドロクトゥルフで、彼は前述のスポレート公ファロアルド一世がラヴェンナの外港クラッセを占領（585 ～ 586年）したのをビザンツ側が奪還するのに重要な役割を演じた。また史料の記述では、彼のビザンツに対する忠誠心は終生揺らぐことは無かったようである。[6] 前述のように王国再建に際して先ずビザンツが採った対策はフランク王国への再接近であったが、同様に前述のように598年にラヴェンナ総督カリニクスが戦闘でアギルルフス王の娘とその夫を捕虜とした事件のように、必ずしもビザンツは一方的にランゴバルドに圧倒されていたわけではなかった。とは言え、これも前述の603年アギルルフス王と総督スマラグドゥス間で和平が締結された後は、スマラグドゥスは国境線に要塞群を新たに設置するなど防衛線の強化に専念した。これはビザンツ側が失地回復の野望は捨て、専守防衛に政策を転換したことを示すと評価されている。前述のようにアギルルフス王とその息子のアダルヴァルド王の時代には、ランゴバルド王は親ビザンツ政策を推進したため、626年まで両国間の平和は維持された。

その平和の時代にビザンツ側では、616 ～ 620年に東方領ではササン朝がシリア・エジプト・パレスティナ占領、バルカン半島へのスラブ・アヴァール族の侵入に対処するため、ビザンツは

イタリア半島に軍隊を派遣する余裕はなくなった。さらに度重なる遠征で、帝国の財政は悪化し、イタリアに十分な資金を投じることもできなくなった。その結果、総督府の兵士への給与の資金にも事欠くようになった。兵士への給与不払いが原因となって、早616年にラヴェンナでの最初の暴動が勃発し、総督ヨハネスが殺害された。この機に便乗してコムプサのヨハネスなる者がナポリを占領して、皇帝を僭称した。イタリア半島における皇帝僭称第一号である。ヘレクレイオス帝は宦官エレウテリウスを新総督としてコンスタンティノープルから派遣。海路ラヴェンナ外港クラッセに上陸。ラヴェンナからローマを経てナポリに至り、ヨハネス率いる反乱軍を鎮圧、その後ラヴェンナへ帰還して給与を払って兵士を宥めた。(7) しかし619年には当の総督エレウテリウス自身が皇帝を僭称し、皇帝位簒奪のためにローマへ向かう途中、軍隊は皇帝への忠誠心からエレウテリウスを殺害した。(8) これらの事件は、反乱者が皇帝を僭称した点から帝国からの分離を策したものとは考えられず、また軍隊の皇帝に対する忠誠心から、この時点ではイタリア半島住民は、まだまだ帝国に対する帰属意識を十分に保っていたと評価されている。(9) 前述のように王位簒奪者であるアリウス派のアリオアルドゥスの即位により、ランゴバルドの政策は反ビザンツに転じたが、ポー川を挟んで睨み合う程度で、大規模な軍事衝突に至ることは無かった。しかし、636年にアリオアルドゥスが亡くなり、前王妃グンディベルガを娶ったロターリ（636～652）が王に選出されると、対立は先鋭化した。彼はビザンツに対して攻勢に出て、ヴェネツィア周辺部などを奪取して領土を拡大した。(10) 今日研究者から、ロターリ王の治世はランゴバルド王国の最盛期と評価されている。しかし、652年にロターリが没すると王国は分裂し、急速に弱体化していった。ロターリの次は息子のロドアルドゥスが王位を継いだが短命で、653年にアギルフィング家のアリペリウスが王位に就いたが、661年に彼が没すると王位継承を巡って内紛が起こり、ベネヴェント公が一時的にランゴバルド王を兼ねる事態も勃発した。それは662年にベネヴェント公グリモアルドゥス一世が王位を奪ったのだが、671年に彼が没すると、二人の息子の兄ロムアルドゥスはベネヴェント公を継ぎ、ランゴバルド王位を弟ガリバルドゥスに譲った。ガリバルディスは同671年中に廃位され、(11) ベネヴェント公国はランゴバルド王国滅亡後も命脈をと持つことになる。ロムアルドゥスがランゴバルド王位を弟ガリバルドゥスに譲った背景には、ビザンツ帝国のシチリア対策が挙げられよう。663年皇帝コンスタンス二世はイタリアに渡り、ビザンツ皇帝として最後のローマ訪問を行い、ナポリを経てシチリアのシラクサに居城を構え、668年暗殺されるまで滞在した。(12) その後もビザンツのシチリアでの活動は続き、692～95年ユスティヌス二世によるシチリア＝テマ設置がなされた。つまり、本拠地であるベネヴェント公国の目前で、活発なビザンツの軍事拠点設置が進む中、ロムアルドゥスは公国維持を最優先させたという事であろう。その後ランゴバルド王国は、712年のリウトプラント王の即位まで、短期間の王位変転を繰り返すこととなった。

680年のランゴバルド王国のカトリック改宗は、そのような弱体期のペルクタリトゥス王（671～688）の治世の出来事であった。同680年にランゴバルド王国の最初の外交使節がコンスタンティノープルに到着し、両国間の平和条約と、皇帝による王国の承認がなされた直後の改宗であったことから、(13) 改宗は和平の条件であったことが分かる。つまりペルクタリトゥス王のカトリック改宗は、事実上のランゴバルド王国の降伏宣言であったのである。弱体化した王国から見ても、軍事強化されつつあるシチリアの存在は脅威であった。他方当時の皇帝コンスタンティノス四世は、674～678年のイスラムのコンスタンティノープル包囲戦を撃退した軍事的才能はあったが、同680年にバルカン半島にブルガール人が侵入してきており、和平はビザンツ側にも渡りに船のものであったのである。

第三章

カトリック化は一時頓挫したが、ランゴバルドの政策は王国内のカトリック司教座があるミラノ・アクィレイア両教会と深く結びついていた。それは、テオドリンダ以後の歴代ランゴバルド王が「三章問題」で、王国内のミラノ・アクィレイア両教会とローマ教会の調停に尽力した点からも分かる。「三章問題」とは、シリア・エジプトで圧倒的に信者が多かった単性論派異端と三位一体説のカルケドン派との教義論争において、妥協案を模索するという当時の深刻な教義問題において発生したものであった。単性論とカルケドン派の対立において、単性論派がモプスエスティア主教テオドロスの著書、キュロス主教テオドレトスによるアレクサンドリアのキュリロスに対する駁論、エデッサ主教イバスによるテオドロスを称賛する内容のマリス宛て書簡の三章書を採り上げ、三つの文献が431年のエフェソス公会議で異端とされたネストリウス派の教義を表明する異端の書であるにもかかわらず、カルケドン公会議はこれらの書を批判していないと非難した。ユスティニアヌス帝は、これを受けて543年から545年の期間に出されたと考えられている勅令において、三章書を異端と宣言した。この勅令に対して東方では不満を表明する者が皆無ではなかったものの、概ね受け入れられた。しかし西方、特にイタリアとアフリカでは、この勅令はカルケドン公会議に反すると批判する者が多く、神学論争が勃発した。

時の教皇ウィギリウスは当初勅令に反対の立場をとったが、545年にコンスタンティノープルに召喚され長期に渡って軟禁状態に置かれて屈服したが、西方は教皇を非難し548年に強硬派のアフリカ司教会議、イリュリクム司教会議とオルレアン司教会議は、ウィギリウスの破門を宣言した。この問題の最終決着として、553年に第二回コンスタンティノープル公会議が開催され、勅令通り三章書の異端が議決されたが、首都滞在中に勅令に反対の西方の聖職者は投獄されたり追放されたりするという強引な言論統制手段が採られた。しかし、西方での三章問題は未だ解消はされなかった。ウィギリウスの後継教皇ペラギウスは第二回コンスタンティノープル公会議では投獄されたローマ側の助祭であったが、獄中で三章書を異端とする内容の執筆をしたため、ユスティニアヌスによって釈放され教皇座に据えられた人物であった。多くのローマやイタリアの聖職者や修道院は、この変節によって教皇となったペラギウスに不満を爆発させた。特に三章書支持の強硬姿勢を見せたのが、ミラノとアクィレイアの両教会であり、アクィレイア司教マケドニウスを中心としてアクィレイアで教会会議を開き、独自の総司教を立てて教皇の傘下から離脱した。これにより「三章問題」は、「最初のシスマ（教会分裂）」と称される。[(1)] そしてランゴバルド王国の支配下でも、両教会は教皇に離反したままだった。ようやく、三章シスマが解消されるのは、658年のことで、ミラノとアクィレイア司教はラヴェンナ大司教の管轄下へに入るという形で、ローマ教会への復帰を果たした。シスマは解消したが、三章書を巡る神学論争はランゴバルドのカトリック改宗後でも燻り続けた。そのため698年に、時のランゴバルド王クニペルト（600 ～ 700）は教皇セルギウス一世と共に首都パヴィアでシノーデを開催して「三章問題」に取り組んだほどであった。[(2)] カトリック改宗後、ランゴバルド諸王は、王国の司教職であるミラノ司教とパヴィア司教に親戚を任じるという形で、王国内のカトリックに対する支配に取り組んでいた。そしてミラノ・パヴィア両司教区を傘下に収めるラヴェンナ大司教の存在が、新たな意味を持つようになったとされている。[(3)]

そのラヴェンナ総司教区は、ユスティニアヌス帝が再征服後、東ゴート王国の首都であったラヴェンナの司教を総司教に昇格させて始まった。同帝はラヴェンナのアリウス派教会の所領などの財産を、ラヴェンナ教会に寄進し、[(4)] その結果ラヴェンナ教会はローマ教会に次いで財産を有する有力教会となった。ランゴバルドの侵入により、ポー川に面したラヴェンナの軍事的重要

性が増し、総督府が設置される経緯の中で、ラヴェンナ教会も発展し、今日の世界遺産に登録されている「初期キリスト教建築物群」が築かれていった。西方の教会としては珍しく「三章問題」では、ユスティニアヌスの勅令を支持し、その後も一貫して三章書異端の立場を堅持した。そのためユスティニアヌス以降のビザンツ皇帝も概ねラヴェンナ教会に対しては好意的であった。

神学論争としての「三章問題」がイタリアでは未だ燻り続ける中、新たな教義論争が幕を開けた。それは「単意論」論争である。「単意論」も、単性論とカルケドン派との教義論争において双方を納得させるため、つまり帝国分裂回避というビザンツ皇帝の要請に応じた学説であった。ヘラクレイオス帝の支持を受け、ローマ教皇ホノリウス一世の回答とコンスタンティノープル総代主教セルギオス一世の起草による「信仰宣言」が、単意論の主要文献となった。しかし、ヘラクレイオス帝が没した641年の初頭にローマで開かれた公会議で、教皇ヨハネスは単意論を異端と宣言し、同帝を「異端者」と非難した。649年のラテラン公会議でも教皇マルティヌス一世は単意論を異端と宣告した。これに対して、ヘラクレイオス帝の孫コンスタンス二世は、総督テオドロス＝カリオパに命じて、教皇マルティヌス一世を653年6月に逮捕させ、教皇は審理を受けるためにコンスタンティノープルに送られ、同年コンスタンス二世は教皇マルティヌス一世をケルソンへ流刑に処している。[(5)] 663年にコンスタンス二世はイタリア半島に赴くと、ビザンツ皇帝として最後のローマ訪問を果たし、ローマ教皇ウィタリアヌスと会見しているが、単意論を巡っての悶着などは記録されていない。注目すべきは、同帝がラヴェンナを訪問せず、シチリアのシラクサに滞在した点である。ランゴバルド王グリモアルドゥス（662 ～ 671）はビザンツ迎撃のために兵を集結させたが、結局戦闘にはならなかった。[(6)] コンスタンス二世の遠征の目的は、イスラムの地中海進出を迎え撃つための海軍基地建設であったとされており、ここにイタリア半島におけるビザンツの最重要地はラヴェンナからシチリアへ移行を開始したと言える。この移行は、692 ～ 95年ユスティヌス二世によるシチリア＝テマ設置をもって完了することになる。ラヴェンナ教会が艦隊編成のため自ら多額の資金援助を申し出たのは、この移行に対する危機感の表れであろう。この多額の資金援助への返礼としてか、或いはラヴェンナ教会の単意論支持への返礼か、666年コンスタンス二世はラヴェンナ教会を独立教会に昇格させた。[(7)] 668年シラクサにてコンスタンス二世が暗殺されると、息子のコンスタンティノス四世（668 ～ 85）は共治帝である弟ヘラクレイオスとティベリオスと共にラヴェンナ大司教レパラトゥス（671 ～ 677）の任期中にラヴェンナ教会に財政上の特権付与をあたえた一方で、自治権制限を行うという、父とは一線を画する動きを見せた。[(8)] 680年ランゴバルド王国の最初の外交使節がコンスタンティノープルに到着し、直後にランゴバルド族全体のカトリック改宗が実現した。680 ～ 81年第六回公会議にランゴバルド諸都市の司教が初めて参加し、平和条約の確認と、皇帝による王国の承認が行われた。同時に公会議では、ラヴェンナ教会独立自治権の撤廃が宣せられ、またコンスタンティノス四世が単意論を異端と非難したことで、単意論問題は決着した。[(9)]

第四章

約半世紀間小康状態が保たれていたビザンツとランゴバルドの平和を破ったのは、710年代初頭のスポレート公によるラヴェンナの外港クラッセの占領であった。これに対して712・713年ランゴバルド王リュートプラントはスポレート公を撃退し、クラッセをビザンツに返還し、スポレート公に同盟者ファロアルトを任命した。[(1)] 結果、リュートプラント王の勢力は、ラヴェンナ総督府の南北で国境を接することになった。717 ～ 18年シチリアのストラテーゴスが反乱を起こし、

皇帝レオン三世（717～41）とは別の皇帝を建てようとした。この状況に乗じて同717～18年リュートプラント王はラヴェンナに進軍し、今度は自らがクラッセを占領した。[2] ここに680年の平和条約は破棄され、リュートプラント王ラヴェンナ総督府征服の野望が明らかとなったのである。リュートプラント王のラヴェンナ征服の動機の一つとして、前述のラヴェンナ教会が王国のミラノ・パヴィア司教区を傘下に入れていた点が指摘されている。[3] つまり今度はカトリック改宗が、争いの原因に転じたというのである。ただし、719・20年スポレートで政変によってリュートプラント王の同盟者ファロアルトが追放されたことで、[4] ラヴェンナ総督府に対する南北の包囲網が綻びてしまった結果、ラヴェンナ総督府全体の攻略は頓挫することになった。

七世紀からビザンツと教皇との関係は悪化の一途を辿り、ラヴェンナ総督の教皇に対する拘束力は行使不能に陥っていた。教皇マルティヌス一世は、649年ラテラノ公会議で単意論を異端と宣言したため、653年6月に総督テオドロス＝カリオパは同教皇を逮捕し、教皇は審理を受けるためにコンスタンティノープルに送られ、同年コンスタンス二世は教皇マルティヌス一世をケルソンへ流刑に処しているように、[5] この時点では総督権の教皇に対する優位が確認できる。しかし、692年クウイニセクト司教会議において、ユスティニアヌス二世によるローマのドゥクス（方面軍司令官）の指名を教皇セルギウス一世が拒否した際には、プロトスパタリオスのザカリウスが教皇を逮捕しようとするのを、ラヴェンナ兵とローマ兵が協力して阻止してしまった。[6] さらに723年教皇グレゴリウス二世は皇帝レオン三世の重税に対してコンスタンティノープルへの税の輸送をストップするという事実上の「大逆罪」を犯した。総督パウルスはラヴェンナとペンタポリスの軍を率いてローマに進軍し、グレゴリウス二世を罰しようとしたが、スポレート公やローマ近郊のランゴバルドと協力したローマ市民によって阻止され、ラヴェンナに帰還せざるを得なかった。[7] 726年着任した最後の総督となるエクトゥキウスは、皇帝の教皇逮捕の命を果たすには全く無力で、何ら手を打つことができなかったのである。[8]

この状況下でリュートプラント王は総督府に進撃、727～728年重要都市オシモを略奪し、ヴェネツィア軍の反撃にあうまでボローニャを一時占領した。[9]他方教皇グレゴリウス三世は、リュートプラント王が、ローマ公領ストリの返還を条件に申し出た同盟関係を拒否し、逆に対リュートプラントの目的で、ベネヴェント公と同盟関係を結んだ。[10]737年頃リュートプラント王はラヴェンナを制圧したが、直後に、スポレート公トランザムトは、ローマとラヴェンナ間の交通の要地ガレサ砦をビザンツから奪取した。そして教皇グレゴリウス三世はスポレート公トランザムトに貢納することで同盟関係を樹立し、スポレート公はガレサ砦を放棄した。[11] 740年教皇グレゴリウス三世はフランクの宮宰カール＝マルテルに書簡を出して、対リュートプラントの援助を要請したが、カール＝マルテルは南仏プロヴァンスでの対ムスリムのフランク＝ランゴバルド連合軍に配慮して、申し出を拒否した。[12] 741年新教皇ザカリアスはスポレート公トランザムトとの同盟を破棄、リュートプラント王に対して彼が占領しているローマ公領内の四都市の返還を交換条件に、リュートプラント王のスポレート征服を援助した。741・2年リュートプラント王はベネヴェントも制圧し、ランゴバルドの統一を果たした。[13] しかし、リュートプラント王は四都市返還を渋ったため、教皇ザカリアスはテルニに行幸し、リュートプラント王と直談判をせねばならなかった。この教皇ザカリアスはビザンツ皇帝に教皇位の確認を求めなかった最初の教皇である。それは、教皇位の後ろ盾が、ビザンツ皇帝から、聖ペテロの後継者へと移行したことを意味し、故にカトリック王の尊敬を受けるべき存在と理論上なったのである。結局リュートプラント王は、教皇ザカリアスと20年間の和平を結び、四都市（ナルニと、スポレート公から奪ったオシモ・アンコーナ・ウマナ）を返還し、ビザンツ領から得た捕虜を教皇に引き渡した。この会見にビザンツ側の関係者は不在であったことは、教皇が一個の独立した元首と自認して行動したことを示し

ている。[14] 742・3年リュートプラント王は総督府に進軍し、コセンナ砦を占領した。コセンナ砦はランゴバルド王国と総督府の境界に位置し、スポレートへ至るアメリア街道にも位置したため、ラヴェンナ包囲や封鎖において戦略上重要であった。743・4年パヴィアでの教皇ザカリアスの説得に応じ、リュートプラント王は総督府からの撤退と、コセンナ領の3分の2を総督に返還した。[15]

744年リュートプラント王没。後継のランゴバルド王ラトキスは、教皇ザカリアスと前王リュートプラントとの20年の平和条約を確認した。749年ラトキス王はペンタポリス征服とペルーディア奪取に着手、教皇ザカリアスはペルーディアに赴いて、遠征を止めるように説得した。ラトキスの姿勢に幻滅したランゴバルド貴族はミラノで王弟アイストゥルフを新王に選出、ラトキスはモンテ＝カシノ修道院に隠棲した。[16] 750年アイストゥルフ王は総督府のコマッキオとフェララを征服し、751年アイストゥルフ王は夏までにラヴェンナを攻略して総督を追放、次いでローマ公領を脅かした。さらに、スポレート公国とベネヴェント公国を王国へ併合し、再統一を果たした。このような状況の下で、752年教皇ザカリアスは没した。[17] 新教皇ステファヌス二世は数度に渡ってビザンツ皇帝コンスタンティヌス五世に援軍を求めたが得られなかった。さらにアイストゥルフ王は教皇に貢納を要求、同時にローマ及び公領の諸都市がアイストゥルフの司法権に服するように要求した。ステファヌス二世は秘密裡にフランク王ピピンと交渉開始し、753年11月ステファヌス二世はパヴィアからフランクへ出発した。754年1月ステファヌス二世はポンティオンでピピンと会見し、754年1月～3月ピピンはアイストゥルフに教皇との和平を促す書簡を送ったが、アイストゥルフはこれを拒否したので、754年3月クイエルジーでピピンはランゴバルド王国への遠征を宣言した。755年ピピンのフランク軍がパヴィアを包囲、アイストゥルフは降伏した。アイストゥルフはラヴェンナ・ナルニ・ケカノとペンタポリスを教皇に返還することを約束したが、ピピンの帰還後、アイストゥルフは都市の返還を拒否しただけでなく、756年1月にローマを攻撃した。これに対してピピンはイタリアに進軍し、スーサ峡谷でアイストゥルフ軍を撃破し、パヴィアで第二次和平締結した。この条約はビザンツを完全無視したもので、条約締結直後に到着したビザンツ使節のグレゴリウスは、パヴィアに赴きピピンに総督府返還を求めたが断られた。そして条約締結直後失意の内にアイストゥルフは没した。これが、史上有名な「ピピンの寄進」の顛末である。[18]

おわりに

本稿は、六～八世紀のイタリア半島情勢について、ランゴバルドのカトリック改宗に至った経緯と、その改宗がビザンツや教皇との関係に与えた影響について考察してきた。先ず、626年にアダルヴァルド王暗殺によって、ランゴバルドのカトリック化一時頓挫したが、ランゴバルドのアリウス派への拘りは反ビザンツ＝イデオロギーと呼ぶべきものであり、信仰上の問題というより政治信条の問題という側面が強かった。逆に言うとカトリックは親ビザンツ＝イデオロギーとランゴバルド貴族たちに理解されていたのであり、それは、アギルルフス王と息子のアダルヴァルド王或いは、実権を掌握していたテオドリンダのカトリック政策が、現実には親ローマ、親ビザンツ政策と連動していたためと考えることができる。実際カトリック化は拒否したにもかかわらず、テオドリンダ以後の歴代の王は、「三章問題」などに積極的に介入してカトリック教会の分裂の収拾を試み、一定の成果を上げていた。

680年のランゴバルドのカトリック改宗は、逆に親ビザンツ政策への転換を意味した。ランゴ

バルド王国が弱体化していたペルクタリトゥス王の親ビザンツ政策への転換は、第一義的に王国の生き残り策であり、その意味でランゴバルドのカトリック改宗はペルクタリトゥス王のビザンツに対する降伏宣言と解することも可能である。その背景に、将来のテマとなるシチリアの海軍拠点化を指摘できる。つまり長期的視野から見て、ランゴバルドのカトリック改宗の遠因は、コンスタンス二世に帰すことができよう。シチリアの海軍拠点化の目的は、ウマイヤ朝イスラム帝国の地中海での海上覇権の掌握を阻止するというものであり、実際にビザンツ海軍の攻撃の矛先がランゴバルド王国や両公国に向けられることは無かったが、攻撃されないという確証があったわけではなかった。王国も両公国も海軍を欠いていたから、海からの攻撃には対処できなかった。ベネヴェント公にせよ、リュートプラント王にせよ、ラヴェンナ総督府侵入の最初の標的が外港クラッセであったのは、ビザンツ海軍を恐れてのことであろう。そう考えると、シチリア＝テマ設置の歴史的意義として、ランゴバルドのカトリック改宗を促す強迫観念を植え付けたという点を指摘することもできるのではないだろうか。

しかし、ひとたびリュートプラント王のような強力な王が出現すると、王国のミラノ・アクィレイア司教区を傘下に入れていたラヴェンナ教会が標的となったように、今度はカトリック改宗が争いの原因に転じてしまうという皮肉な展開となった。そのラヴェンナ教会はというと、666～680年の間独立自治教会として教皇の傘下から脱していたという歴史的経緯から、教皇権からの再独立を志向していた。初めてビザンツ皇帝の承認無しで教皇となったザカリアスが、ビザンツ関係者抜きの会見で、リュートプラント王に総督府撤退を説得した理由を、このラヴェンナ教会の再独立運動に見出すことができる。680年のコンスタンティノス四世のラヴェンナ教会の独立自治権撤回は、ビザンツとランゴバルドの平和条約確認と同時決定されたものであるから、平和条約を破棄したリュートプラント王はビザンツ皇帝の決定を遵守する理由は無かった。つまりランゴバルド王のラヴェンナ占領は、ラヴェンナ教会に巻き返しの機会を与えかねないものでもあったのである。ラヴェンナ教会を教皇権に結び付けておくには、ビザンツの教会秩序が維持されなければならなかったのである。

註

はじめに

（1）増田四郎著、『ゴート戦役とイタリア経済社会の変質』、一橋論叢20（５/６）、(1948)、154頁。

（2）Gregorius Ⅰ papae, Registrum episturum, *Monumenta Germaniae Historica Epistolae* 1, ed. Ewald, P., and Hartman, L., (Berlin, 1891), S. 30.
（以下*MGH Ep* と略記。）

（3）Lopez-Jantzen, N., *From The Roman Empire to The Middle Ages: The Struggle for Ravenna in the Eighth Century*, Dissertation Submitted in Partial Fulfillment of The Requirements for TheDegree of Doctor of Phirosophy in the Department of History at Fordham University, New York 2012, p.146.

第一章

（1）Paulus Diaconus, *Historia Langobardorum* , ed. Waiz, G., Ⅱ, 9,（以下、*HL*と略記）*Monumenta Germaniae Historica Scriptores Rerum Longobardicarum et Italicarum Saec.VI−IX*. (Hannober, 1878)

（以下 *MGHSRL,*と略記）S.77. Ⅱ, 14, S.81. Ⅱ, 25-27, S.86－87.

Brown, T. S., *Gentlemen and Officers: Imperial Administration and Aristocratic Power in Byzantine Italy A.D. 554-800*. Rome: British School at Rome , (1984) p.51.

Bognetti, G. P., " Trdizione longobarda e politica byzantine nello ducato di Spoleto." *Rivista di Storia di Diritto Italiano*26-7 (1953-1954), pp. 269-305.

（2）Paulus Diaconus,　*HL*, Ⅱ, 28-32, *MGHSRL,* S.87-91.

（3）Paulus Diaconus,　*HL*, Ⅲ, 9-10, *MGHSRL,* S.97.

（4）Cosentino, Slvatore., *Stria dell' Italia Bizantina(VI～IX secolo)*: *da Giustiniano ai Noemani*, Bologna:Bononia University Press, (2008), p.260.

Paulus Diaconus,　*HL*,　Ⅲ, 11, *MGHSRL,* S.97-98.

（5）Paulus Diaconus,　*HL*,　Ⅲ, 16, *MGHSRL,* S.100-101.

（6）Paulus Diaconus,　*HL*,　Ⅲ, 22, 29, 31, *MGHSRL,* S.104, 108, 110-111.

（7）Paulus Diaconus,　*HL*,　Ⅳ, 8-9, *MGHSRL,* S.118-120.

（8）Paulus Diaconus,　*HL*,　Ⅳ, 20, *MGHSRL,* S.123.

（9）Paulus Diaconus,　*HL*,　Ⅳ, 28, *MGHSRL,* S.125-126.

（10）Paulus Diaconus,　*HL*,　Ⅳ, 21, *MGHSRL,* S.123－124.

（11）Paulus Diaconus,　*HL*,　Ⅳ, 28, *MGHSRL,* S.125-126.

（12）Lopez-Jantzen, N.,　*op.cit.*,　p.146.

（13）*Ibid*., p.146.

（14）*Ibid*., p.147.

第二章

（1）Paulus Diaconus,　*HL*, Ⅱ, 28-29, *MGHSRL,* S.87-88.

（2）Brown, T.S., *Gentlemen and Officers,* p.70.

（3）Paulus Diaconus,　*HL*,　Ⅲ, 13, *MGHSRL,* S.100.

（4）Gregorius Ⅰ papae, Registrum episturum, *MGH Ep* 1, Ⅱ, 28, S.124-125.

（5）Paulus Diaconus,　*HL*,　Ⅲ, 16, *MGHSRL,* S.100-101.

（6）Paulus Diaconus,　*HL*,　Ⅲ, 19, *MGHSRL,* S.102.

（7）*Le Liber Pontificalis*, texte, intoroduction, ed. L.Duchesne, 3 vols. (Paris, 1886-1957), Tome Ⅰ, 70, 2, p.319.（以下、*LP*と略記。）

（8）*LP*, Tome Ⅰ, 71, 2, p.321.

（9）Lopez-Jantzen, *op.cit.*, , p.50.

（10）Paulus Diaconus,　*HL*,　Ⅳ,　45, *MGHSRL,* S.135.

（11）Paulus Diaconus,　*HL*,　Ⅳ,　51, *MGHSRL,* S.139. Ⅴ, 7-8, 33, *MGHSRL,* S.147-148, 155.

（12）Paulus Diaconus,　*HL*,　Ⅴ, 6, 11, 13, 30, *MGHSRL,* S.146-147, 149-150, 150, 154.

（13）Paulus Diaconus,　*HL*,　Ⅴ, 34, *MGHSRL,* S.156.

第三章

（1）*LP*, Tome Ⅰ, 62, p.303.
（2）Lopez-Jantzen, *op.cit.*, p.147.
（3）*Ibid*., p.147.
（4）Agnellus, *Liber Pontificalis Ecclesiae Ravennatis,* 70, *MGHSRL,* S. 326.
（5）*LP*, Tome Ⅰ, 76, 2-8, p.336-338.
（6）Paulus Diaconus, *HL*, Ⅴ, 6, 11, 13, *MGHSRL,* S.146-147, 149-150, 150.
（7）Agnellus, *op.cit.*, 114, *MGHSRL*, S .352-353.
（8）Agnellus, *op.cit.*, 115, *MGHSRL*, S .353-354.
（9）*LP*, Tome Ⅰ, 80, 2, P.348.

第四章

（1）Paulus Diaconus, *HL*, Ⅵ 44, *MGHSRL,* S.180.
（2）Paulus Diaconus, *HL*, Ⅵ 49, *MGHSRL,* S.181-182.
（3）Lopez-Jantzen, *op.cit.*, p.147.
（4）Paulus Diaconus, *HL*, Ⅵ 55, *MGHSRL,* S.184.
（5）*LP*, Tome Ⅰ, 76, 2-8, p.336-338.
（6）*LP*, Tome Ⅰ, 86, 6－8、pp.372f.
（7）*LP*, Tome Ⅰ, 91, 14-17, pp.403f.
（8）*LP*, Tome Ⅰ, 91, 19,.pp.405f.
（9）Paulus Diaconus, *HL*, Ⅵ 55, *MGHSRL,* S.184.
（10）Paulus Diaconus, *HL*, Ⅵ 56, *MGHSRL,* S.185.
（11）*LP*, Tome Ⅰ, 92, 15, p.420.
（12）*Codex Carolinus, MGH, Ep*., 3, ed. Gundlach, W., (Berlin, 1892), S.2
（13）Paulus Diaconus, *HL*, Ⅵ 57-58, *MGHSRL,* S.185-187. *LP*, Tome Ⅰ, 93, 4-5, pp.426f.
（14）*LP*, Tome Ⅰ, 93, 6-11, p.427. Noble, T.F.X., The Republic of St. Peter:The Birth of the Papal State, 680-825. Philadelphia:University of Pennsylvania Press,（1984）, p.52.
（15）*LP*, Tome Ⅰ, 93, 12-13, p.429.
（16）*LP*, Tome Ⅰ, 93, 23, pp.433f.
（17）*LP*, Tome Ⅰ, 93, 29, p.435.
（18）*LP*, Tome Ⅰ, 94, 5.~43, pp.441-452.